

第34号

年4回発行
無料

よきことを、よきひとへ。

東北復興新聞

復興現場の今がわかる
「好事例」共有メディア
WEB版▶http://www.h-u-g.jp

目次

4面 [特集]



[宮城県石巻市 蛤浜]

住民5人の浜に1万人を集客
ゼロから描く地域のビジョン

6面 [東北のいま]



大堀相馬焼を世界へ
“4代目”松永窯の挑戦

7面 [ふくしま復興]



[福島県南相馬市小高区]

課題こそが一番のビジネスチャンス
避難指示解除へむけ準備拠点



3年越しの進水式

宮城県石巻市 狐崎浜で新造船「大洋丸」の進水式が行われた。同じ浜の漁師たちが、自分たちが送った祝いの大漁旗を取り付ける。

Policy

Policy PICK UP DATA

福島県 2014年度重点プロジェクト

人口定着、風評対策に攻めの政策

福島県 2014年度重点事業

13の重点プロジェクト	事業費 (単位:億円)
人口減少・高齢化対策	1,423
環境回復	2,455
生活再建支援	1,443
県民の心身の健康を守る	360
未来を担う子ども・若者育成	316
農林水産業再生	646
中小企業等復興	1,577
再生可能エネルギー推進	72
医療関連産業集積	174
ふくしま・ぎずなづくり	51
ふくしまの観光交流	14
津波被災地等復興まちづくり	888
県土連携軸・交流ネットワーク基盤強化	412
合計	9,831

※2014年度福島県総合計画より。数字は再掲事業を含む

子育て世代向けに
児童預かり付きの
コ・ワーキング
スペースも登場

2014年5月、福島県からの県外避難者数はピーク時の約7割の4万5千854人まで減少した。県内へ人が戻りつつある中、人口の定着を図ろうと、福島県は「福島県総合計画 ふくしま新生プラン」を掲げ、復興再生を目指している。今年度の予算は約1.7兆円。重点プロジェクトとして人口減少・高齢化対策や環境回復、生活再建支援など13を設定している。

重点施策の中心となる人口減少・高齢化対策には「空き家・ふるさと復興支援事業」や「高齢者社会参加活動支援事業」などが並ぶ。なかでも特徴的なのが起業支援の「ハンサム起業家育成・支援事業」だ。「ハンサム起業家育成・支援事業」は起業相談会、実践起業塾、創業支援、子育て世代向けコ・ワーキングスペースで構成される。女性・若者を対象に起業相談や起業塾を開催するほか、審査に通った起業希望者には必要

経費の4/5以内、上限200万円を助成。必要なら専門家を派遣して事業継続や販路拡大の相談にもあたる。女性が起業しようとするとき、家庭や育児との両立が大きな問題となる。そこで「子育て世代向けコ・ワーキングスペース」ではスペース内で利用者児童の一時預かりを行い、女性が安心して仕事に打ち込める環境を用意する。「何かをやりたいけれど、どうやっていいかわからない」という人のためには事業計画をブラッシュアップしたり、起業家同士や働き手となる短時間労働希望者とのマッチングをしたりするなど、きめ細かいフォローアップも行う。県では2003年より福島駅西口の「コラッセふくしま」にインキュベートルーム(起業家育成スペース)をおき、県内で社会的課題の解決にとりくむ起業家を「ふくしまベンチャーアワード」で表彰するなどして積極的な起業支援を行ってきた。今回コ・ワーキングスペースを運営することとなった株式会社クリフ代表取締役の石山純恵さんもインキュベートルーム出身者であり、2013年の「ふくしまベンチャーアワード」でグ

「風評の払拭」
に向けた
戦略的情報発信

そのほかに重点事業として掲げる「ぎずなづくり」においては、戦略的情報発信事業として約4億円の予算で情報発信を強化している。2013年からは「ふくしまから はじめよう」プロジェクトを始動。「福島県」「福島県ならは」の新たな取り組みを推進するとともに、民間団体などとの新たな連携や、SNS等を活用した発信を強化している。フェイスブックページの「いいね!」数は4万を越え、都道府県では全国一位。職員の顔が見える発信を行うなどの工夫を凝らしている。「福島ならは」の発信としては、「再生可能エネルギー先駆けの地」を目指し、福島空港メガソーラーや洋上ウインドファーム実証研究事業など、再生可能エネルギーの研究開発にも力を入れている。また、2013年に全国のご当地キャラクターが一堂に会した「ご当地キャラこども夢フェスタ」などを開催。2014年にはアジア初上陸となるポランティアと音楽を融合したロックフェス「ロックコープス」にも参画し、「福島発」の取り組みにも力を入れている。

未だ課題も多く長い復興の道りが続く福島県だが、こうした攻めの情報発信戦略がひとつの形になることで、新たなふくしまが創られていくことに期待したい。

B Business

産業復興

キリン絆プロジェクト 3年 農水産業支援・福島県を軸に1年延長へ

Business
PICK UP
DATA

被災3県
水産加工業者の売上回復状況

8割以上回復は ▶ 28%

まちづくりに
つながる
協働チームの
産業支援

総額60億円を拠出し2011年7月から開始されたキリングループによる「復興応援 キリン絆プロジェクト」が今年6月で3年の区切りを迎えた。半分以上の支出となる農業・水産業支援については、当初2015年3月までの取り組みを予定していたが、福島県においては1年延長する方針だ。

2013年からは、前年までの農業機械や養殖設備などハード中心の支援から切り替え「第2ステージ」として、ブランド育成や販路拡大、人材育成などのソフト支援を実施。農業、水産業それぞれ各地域で事業者グループを選定し、助成を行ってきた。

案件形成から助成決定にあたっては、地域の協働を強く意識。事業者同士の横のつながりに加え、行政との連携も必須要件とした。



水産業支援は6月だけでも4回の贈呈式・試食会が行われ、これまでに21の支援先に助成を行っている。
写真=和田剛

福島の産業に
何ができる？
原点に立ち返り
考える

今年度以降、計画を延長もして中心的に取り組むのは、福島の産業復興支援だ。「諦めずに挑戦している方々がいる中、まだ我々はやり切れていない。ゼ

「協働ってなんですか？」という問いから始まります。強みをかけ算するのが協働。それぞれの強みを見つめ直し「まじろ」と。そう話すのは、キリンビル株式会社CSV推進部の古賀朗さん。そしてその狙いをこう続ける。「特に三陸沿岸部の多くの地域では、水産業はまちづくりと直結します。行政も含めた地域の連携プロジェクトにすることで、単なる商品開発や事業の成長だけに留まらず、地域全体への波及効果が見込めるのです」。ビジネスと地域社会が一緒になった取り組みは、CSV(共有価値の創造)の好事例と言えるだろう。

ロベースで何ができるかを検討している」と古賀さん。農業、水産業それぞれ約1億円の予算をあてる予定だ。

現在は県内各地を改めて訪問しながら、課題整理から行っている。古賀さんは、この3年間に岩手県や宮城県で実践してきた地域単位の支援とは異なる形も示唆する。「例えば情報発信。風評対策を考える前に、そもそも魅力を発信できていたのかという視点もある。また県全体として出荷が落ち込んでいる品目もある。地域単位にこだわらず、課題に応じて打ち手を検討している」。夏頃には支援方針を固める予定となっている。



よ本格化

課題

災害公営住宅は人気にバラつき、資材・人件費の高騰も

入居倍率は各市町村、また同じ市内でも地区によってバラつきが生じている。石巻市では中心市街地の「駅前北通り一丁目住宅」が5.8倍となる一方、津波被害の大きかった沿岸部の「門脇住宅」は0.3倍と不調だ。また、建設・土木業界における資材費の高騰や人材不足の影響で、入札不調や整備計画の見直しを迫られるケースもある。被災地の住宅再建を最優先に後押しするような施策を実行することが必要だ。

災害公営住宅の応募倍率

※各市町村発表情報より

岩手・大船渡市

(2014年3月現在)

募集戸数 734
申込数 713
0.9倍

福島(第1期)

(2014年2月現在)

募集戸数 528
申込数 1118
2.1倍

市内でも大きな差

中心市街地に申し込みが集中し、津波被害の大きかった沿岸部は敬遠されがちだ

宮城・石巻市

(2014年2月現在)

整備戸数 2,368
登録世帯数 4,143
1.7倍

駅前北通り一丁目住宅

整備戸数 65
登録世帯数 376
5.8倍

門脇住宅

整備戸数 150
登録世帯数 39
0.3倍

高齢化も懸念。行政・企業・NPOのタッグでコミュニティづくりをサポート

入居後の高齢化率の高さも懸念材料の1つだ。仮設住宅と比べコミュニケーションが希薄になりやすいとも指摘される。高齢者の孤立を防ぐため、行政や企業、NPOなどが連携して長期的な視点でコミュニティづくりをサポートする必要がある。医療・介護などのハード面の整備に加え、巡回サービスや集会所などの交流スペースの確保を通じて住民間の交流を促す支援が求められている。

災害公営住宅の高齢化率(50世帯以上)

山元町	53.3%	仙台市	33.8%
女川町	51.1%	大船渡市	30.4%
大槌町	44.5%	釜石市	28.8%
相馬市	44.0%	石巻市	27.4%
いわき市	35.2%	東松島市	23.1%

※2014年5月1日現在、河北新報社調べ

C まちづくり Community

[岩手県陸前高田市] “応援株主”による新拠点・「箱根山テラス」9月開業 町をソーシャルビジネスの集積地へ



研修や催し、宿泊できる施設「箱根山テラス」。9月のオープンに向け建設が進む様子は、専用のフェイスブックページでもアップしている。

陸前高田市復興まちづくり会社「なつかしい未来創造」の町野弘明さん

陸前高田から大船渡へ向かう国道45号線沿いの高台に、この7月、イオンスーパーセンター陸前高田店がオープン。新たな商業施設の出店に伴い、地域経済の活性化が期待されている。一方で、被害の大きかった陸前高田駅周辺を中心市街地復興にはまだ時間がかかる。大手資本の商業施設が先行することで、駅前商店街を核としたまちづくりの効果が薄れてしまうのでは、と懸念する声もある。

市内初となる災害公営住宅(下和野団地)が今年9月に完成するなど、住民の暮らしにも明るい兆しが多少見えるものの、本格的な復興に向けた課題は多い。隣接する大船渡や気仙沼における漁業のような基幹産業がなく、第1〜3次産業がバランスよく地域経済を支えていた陸前高田では、シンボリックな復旧復興の姿が描きにくいという背景がある。

なつかしい未来創造は、連携する一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワークを母体として、2012年度の内閣府による雇用創出事業の一環で、気仙地域に起業家40人を輩出した実績を持つ。例えば、Uターンの若者による陸前高田産のぶどうを原料にした石鹸の販売、主婦仲間で作るパン製造店舗運営を行うコミュニティカフェ、海沿いの長洞集落に住む女性、高齢者による水産加工品の開発・販売や漁業体験の提供、米崎地区のリングゴを使った地ビール

地域から起業家を
生み、育てたい

現在描いている青写真の一つが、ソーシャルビジネスのインキュベーションタウン構想だ。震災から3年が過ぎ、復興予算が削減されるなか、国の支援に寄りかかっているわけにはいかない。そこで、地域課題を解決するソーシャルビジネスを起して、出資という形で資金提供を受け、適切に還元しながら結果的に地域も潤う仕組みをつくらうという発想だ。

「なつかしい未来創造」は、連携する一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワークを母体として、2012年度の内閣府による雇用創出事業の一環で、気仙地域に起業家40人を輩出した実績を持つ。例えば、Uターンの若者による陸前高田産のぶどうを原料にした石鹸の販売、主婦仲間で作るパン製造店舗運営を行うコミュニティカフェ、海沿いの長洞集落に住む女性、高齢者による水産加工品の開発・販売や漁業体験の提供、米崎地区のリングゴを使った地ビール

の全国発信など、以前なら「ビジネス」には縁遠かった人も新たな生業づくりに挑戦した。内閣府の事業自体は単年度で終了したが、こうした取り組みを息の長いソーシャルビジネスに発展させたいという願いもある。

そうした思いの実現に「役員いそうな施設が今年9月にオープンする。市内の東端、大船渡との市境に近い箱根山(標高446.8m)の中腹に建設中の「箱根山テラス」だ。地元の木材をふんだんに利用した木造2階建て。眼下には風光明媚なリアス式海岸を望み、海からの風が心地よい。「テラス」は研修施設と宿泊施設の機能を備え、まちづくりや起業に関する研修やワークショップの会場として、また遠方から観光やボランティアに訪れる人の宿泊施設としても活用していくという。

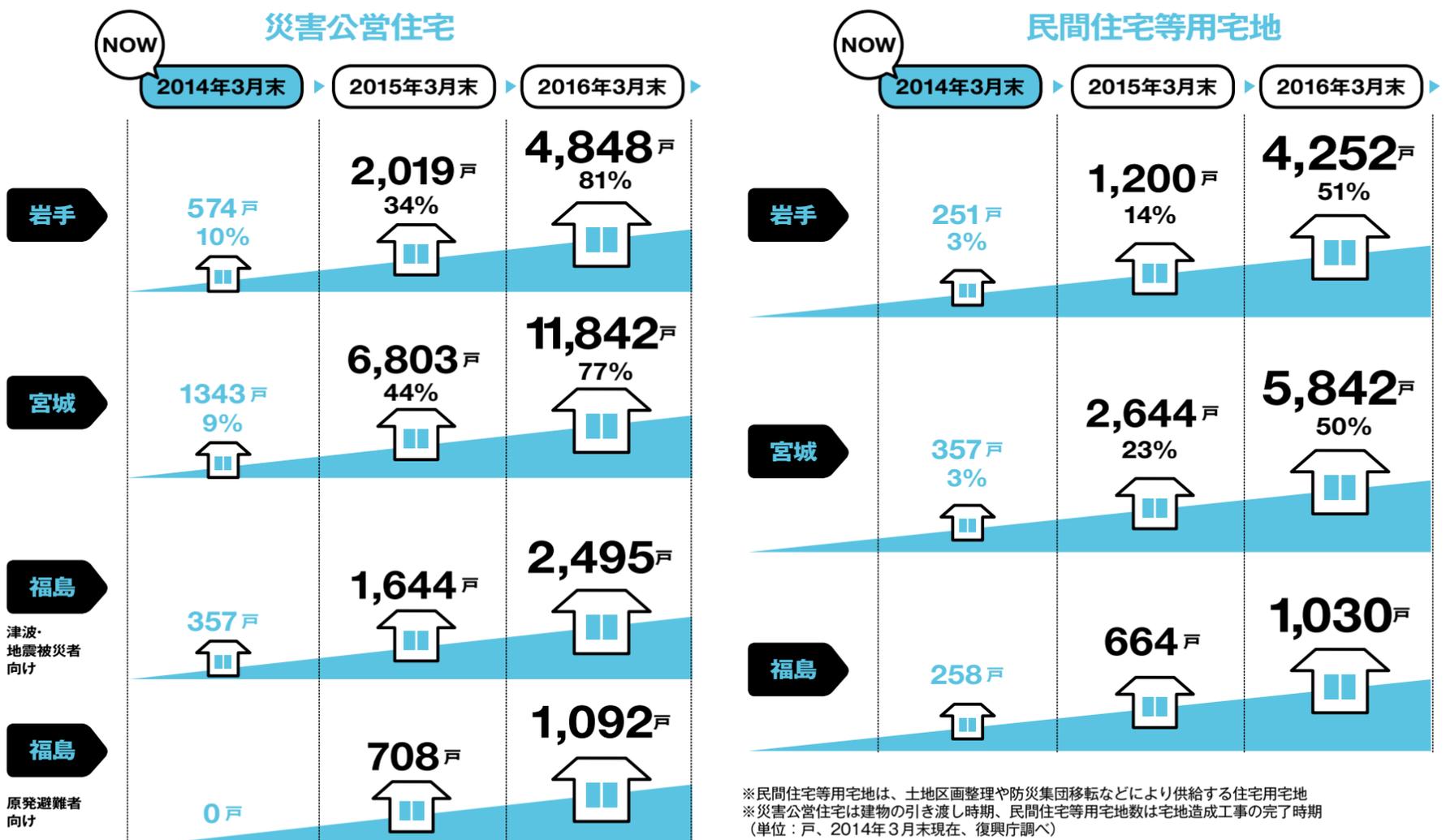
建設にあたっては「5万円の「応援株主」を募集。集まった750万円は初期費用の一部に当てた。国や自治体などの公的な支援ではなく、「陸前高田を応援したい」という人の出資によって復興を支える試みの第一歩といえる。「地元の人だけでまちづくりを進めるのは厳しい面もある。域外の人が楽しみながら関わり続ける仕組みが必要。箱根山テラスがその拠点になれば」と町野さんは期待を込める。

これまでなつかしい未来創造が牽引してきた箱根山テラス事業だが、7月からは新たな運営主体として地域発で生まれた株式会社箱根山テラスにバトンタッチする予定だ。陸前高田や気仙地域のみならず、全国の人々の間にも新たなつながりを生み出す場になるよう、9月開業を目指すして走り始める。

Community PICK UP DATA

仮住まいから恒久住宅へ。住まいの移行いよいよ

今後2年で公営住宅の8割・民間住宅地の5割が整備へ



※民間住宅等用地は、土地区画整理や防災集団移転などにより供給する住宅用地
※災害公営住宅は建物の引き渡し時期、民間住宅等用地数は宅地造成工事の完了時期
(単位：戸、2014年3月末現在、復興庁調べ)

※福島県は計画策定中のため%は非表示

Special

特集

宮城県石巻市蛤浜 住民5人からの 再出発

小さいか



自然学校などの拠点となるキャンプ場(上)は2014年5月に、ツリーハウス(下)は2014年6月に国道沿いのバス亭裏に、続けて完成した。写真提供=東北ツリーハウス観光協会



浜のビジョンを描き、周囲を巻き込む大きな力となったスケッチ(上)。亀山さんと共にプロジェクトを引っ張るリーダーの魚谷さん(中・右)と島田さん(下)

ん。カフェの裏手の古民家を借り受け、この夏のプレオープンへ向け改修作業に汗を流す日々だ。またツリーハウスは、東北ツリーハウス観光協会とともに推進。国道沿いのバス亭のすぐ裏に特徴的なデザインで立てられており、蛤浜へ下る階段の大きな目印となっている。こうして、亀山さんの思いとビジョンに共鳴した仲間や関係者が一緒に取り組み、新たな価値を生み出し続けている。

数々のプロジェクトを進める亀山さんは、蛤浜を「学びの浜」にしたいと話してくれた。「浜にある地域資源を、みんなでどんどん活用すればいい。近隣の水産高校の生徒はここで外部の企業と連携して未利用資源の商品化をする。漁家民泊のデザインには建築学生達が実践の場として関わってくれている。もちろん、キャンプ場で自然学校を行うこともできる。浜全体が教室になるのです」。教室という例えは、元々高校教師だった亀山さんらしい発想だ。

この方向性の先に、浜に新たな収益源をつくりたいという思いがある。元々漁業以外に仕事の無い浜だったが、学びの浜となることで人の流れが生まれ、宿泊やコンテンツから新たなビジネスが生まれることも考えられる。

そして、亀山さんは「浜の多様性が持続すること」を目指したいのだと言う。「復興事業を進める中では、複数の浜を統合するという話もありましたが、それよりも、個々の浜が強みや特徴を伸ばして『バーチャルな統合』ができないかと考えています。例えば、蛤浜は学びの浜として外部と交わる拠点となる一方、漁業や加工の設備などは水産業に特化する隣の浜へ移す。また別の浜ではシェアハウスなどをつくり、住む場所として存続させる、といったように、効率だけを求めて復興を進めた結果、もし小さな地域が無くなってしまうとしたら、それは多様性が失われるということになります。果たしてそれは豊かなのだろうかと思うのです」。亀山さんの視野には、蛤浜だけでなく牡鹿半島全体の美しい未来図が入っている。

「僕らは震災復興支援ということで、人や資金が集まり易い環境にありましたが、彼らは誰も知らないところから始めて20年30年続けて来ています。その精神力には本当に脱帽です。地域の暮らしをなんとしても残したいという情熱がものすごい」。

目標とすることができた先人達がいるからこそ、困難に直面しても諦めずに続けることができる。亀山さんは話す。復旧作業も一定の目処がたち、周囲の生活も落ち着き始めている。新たなステージに入ってきたからこそ、今は後をスビードを少し緩め、地元民とのコミュニケーションをより丁寧にしたがら「地に根をはって」活動をしたいと亀山さん。今日も多くの仲間とともに、蛤浜で汗を流していることだろう。

日本を旅して見えた
地に根をはる大切さ

フォトエッセイ

東北のいま

[26] 大堀相馬焼を世界へ
「4代目」松永窯の挑戦

写真・文 岐部淳一郎



親元を離れた我が子が稼業を継ぎたいと戻ってきた時、両親はそれを誇らしく思うか、それとも同じ苦労をさせたくないと止めるのか？

「伝統工芸には可能性がある」と息子の松永武士(たけし)さんが思ったきっかけは、海外での起業経験だ。武士さんは、大学在学中に、中国の大連で日本人駐在員とその家族向けに現地での医療コーディネート業を営み、カンボジアでは現地入りするビジネスマンや観光客向けにマッサージの店舗を構えた。いずれの国でも感じたのは、日本の高い技術への信頼とニーズの高さ。それは日本の伝統工芸への可能性であるとも感じた。生まれ育った浪江町(旧大堀村)一円の窯元が皆、原発事故で廃業を余儀なくされていることを受け、武士さんは大堀相馬焼の窯元のひとつである実家・松永窯に戻る決心をした。

大堀相馬焼と言えば、青磁色の筒に広がる美しいひび、江戸時代の藩主・相馬氏が由来の走り駒(馬)の絵、持ち手が熱くならない二重構造に特徴がある。伝統工芸の名にふさわしい重厚感と手作業で形作られる波のような形状はそれだけでも美しいが、武士さんはここに新しい試みを加えた。ピンク色に焼き上げた「SAKURA MUG」(桜マグ)、10人のデザイナーが走り駒をリデザインする「KACHI-UMA」(勝ち馬)シリーズがその一例。そして、これらをフランス・パリの世界的展示会「メゾン・エ・オブジェ」に出展し高い評価を得て、国内では都心の大手百貨店での展開をひかえる。

新しい試みは従来のやり方と衝突することもあるが、時代に応じた柔軟さは実は大堀相馬焼の本質でもある。江戸時代の大堀相馬焼は、白磁に近いような、薄く、軽い陶器であり、大堀相馬焼の特徴とされる

ヒビ模様、走り駒の絵、二重焼き……などは実は明治時代や戦後に追加された工夫だったということが最近わかった。先に述べたピンクの色彩やデザイナーコラボレーションには、伝統工芸に「デザイン」と「グローバル」をかけあわせることで相馬焼の魅力を再発見してもらおうという変化の種だ。この種が芽を出し、変化の流れが起きた時、新しい大堀相馬焼が生まれるのだろう。武士さんはその種をまいている。

武士さんが、松永窯を継ぐ意志を伝えた時、両親は反対したという。取材の時も、父・和生さんは武士さんのことを「自称4代目」と言ってみたり、母の京子さんも「陶器はキツイわよ」を繰り返した。ただ、厳しいことを言いながらも、自分たちと共に仕事をしていることを誇らしく思っているように見え、時折のぞかせる3人の笑顔はとても良く似ていた。

Fukushima

ふくしま復興

おだか
[福島県南相馬市 小高区]

2年後の完全帰還へ向け新拠点「課題」と「価値」の見える化を

避難指示の解除まで立ち入れるが泊まれない

原発事故の直後から警戒区域に指定され、全住民約1万3千人の避難生活が続く、福島県南相馬市の小高区。2年前からは「避難指示解除準備区域」に指定され帰還準備のための立ち入りができるようになったが、宿泊することができない。現在2016年4月の完全帰還を目指し、除染作業やインフラ整備などが進められている。

帰還へ向けての課題は多い。作業員不足などにより除染作業は予定から遅れ、資材や人員不足により家や事業所を直すにも建設業者の確保も難しい。昨年8〜9月に行われた南相馬市の住民意向調査によると、その時点で明確な帰還意志を示しているのは3割に満たない(全体の約9割が小高地区住民による回答)。その数字は20代では7.3%、30代で8.6%と更に小さくなり、完全帰還後は高齢者中心の町となる可能性が高い。

Fukushima
PICK UP
DATA

福島県・県外避難者数
ピークより

3 削減の
4.6 万人に

2014年5月 福島県発表

こうした中、今年5月に立ち上がったのが、原発避難区域では初となるコ・ワーキングスペース「小高ワーカースペース」だ。帰還へ向けて準備をした住民や、小高地区で仕事やビジネスを考える外部人材のためのスペースとして、電源やインターネット環境、会議室等の働く環境、そして人が集える「場」を提供する。

「課題は山積みですが、だからこそ小高は大きなチャンスがある場所なんです」と語るのは、ワーカースペース代表の和田智行さん。そして、課題をチャンスに変えるためのカギは、情報にあると言う。「例えばいまここでは、毎日1千人を越える除染作業員が来ています。また数年後には、帰還者が例え3割でも数千規模の商圏ができる予定です。でも現在は、コンビニは週に2回の移動販売車が来ているだけなんです。ほんの一例ですが、こうした情報はビジネスチャンスにもつながると思います」。

今どれくらいの人が、どの

課題こそが
一番のビジネス
チャンス



小高区を中心地、元々は宴会場だった建物の中にオープンしたコ・ワーキングスペース。この日は、帰還を決め、事業の立ち上げを企画する住民の方と支援者が打ち合わせをしていた。左端が代表の和田さん。

ように帰還準備を進めているのか。どこでどのような事業が再開するのか、その上で何が課題となっているのか。さらに今だけだけの市民団体や支援団体、視察者が小高に訪れているのか……。課題や価値、ビジネスチャンスを導くためにはこうした地域の情報が描かせない。小高ワーカースペースが情報ハブとなり整理・発信していくことが、地域住民や外部の企業や人材が、小高地区で新しく何かを始めるきっかけになると和田さんは話す。

人が集える
「食堂」も
つくりたい

今後は情報発信や場所の貸し出しに加え、セミナーやイベ

ントなどを通じて小高に関わる人を増やしていく。そして、もう一つ企画しているのが、食堂の運営だ。多くの人が出入りしているのにも関わらず、食事をとれる場所がないという小高の課題。その解決施策を、地域の方とともに自ら行う形で、シェフは地元の主婦の方や、帰還を目指していたり既に避難先で事業を再開されている飲食関係の事業者を予定している。

避難区域内ということでは、物件の確保から近隣住民の理解、保健所の認可まで課題は多いが、なんとか形にしたいと日々奮闘する和田さん。課題があるからこそ、課題解決に挑む貴重な人材が集まることは、震災によって明らかになったことの一つだ。この新たな拠点から、これからいくつの取り組みが生まれるのだろうか。

避難指示解除始まる。田村市に続き川内村、楢葉町も

4月1日に
田村市東部で
初の避難指示解除

原発事故による避難指示区域のうち、除染が進み放射線量の低下が確実と見られ、インフラ等生活環境の整備が進む「避難指示解除準備区域」について、少しずつ避難指示解除が進んでいる。

今年4月1日、福島県田村市東部の都路地区で初の避難指示解除となった。隣の川内村は、事故直後は全村避難となったものの2012年1月に帰村宣言。町の一部が現在も避難指示に指定されているが、政府は今年7月末の解除の見込みを示した。町のほぼ全域が避難区域となっているその隣の楢葉町は、5月末に2015年春の避難指示解除を目指す事を発表した。

環境整備と
合意形成が課題

避難指示解除の動きが進む一方

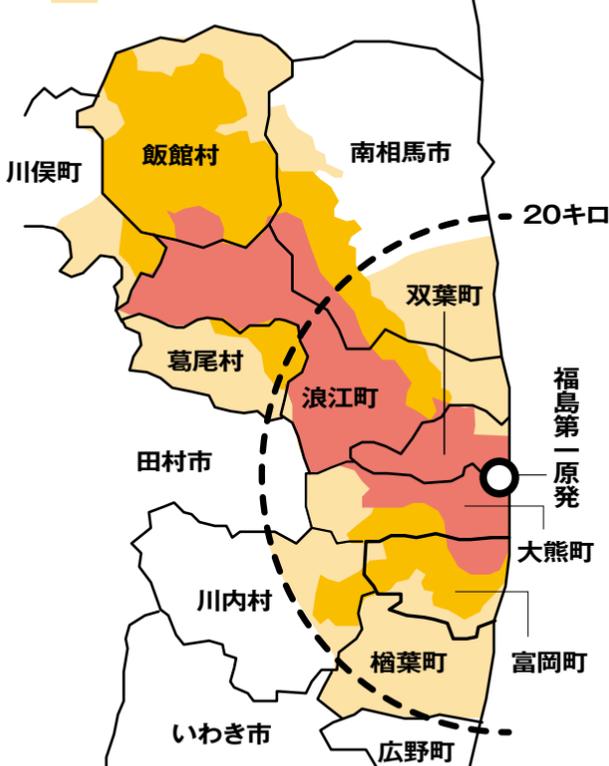
避難指示解除を巡る各市町村の動き

- 田村町 2014年4月に市東部の都路地区で初の避難指示解除
- 川内村 2014年7月に村東部の避難指示解除予定も慎重意見
- 楢葉町 2015年春意向の避難指示解除を目指す目標発表

※各市町村発表情報より作成

避難区域の状況

帰宅困難区域 移住制限区域
避難指示解除準備区域



T ravel

観・食・遊



vol.9 岩手県

南部鮭加工研究会 鮭冷燻・ケズリ

原料は鮭と塩のみ。
胃袋を掴まれる懐かしい匂い



第2回宮古新加工品コンクールで最優秀賞に選ばれた逸品。「鮭」と文字を打つと、度々「酒」と変換されるわけだ。お酒との相性もバッチリである。



「パスタにふりかけたら綺麗ね」、「クリームチーズと合わせてディップにしたらオシャレかも」。南部鮭加工研究会の「鮭冷燻・ケズリ」が届いた際、こんな妻の提案を振り切り、まずはシンプルに「ご飯の上にふりかける」を選択した私。炊きたてのご飯の上の妖艶なダンスと、沸き立つどこか懐かしい匂いに我を忘れ、一気に胃袋へと流し込まずにはいられなかった。

産卵期に川を遡る過程で、雄の鼻が曲がることから「鼻曲がり鮭」と呼ばれる岩手県沿岸の鮭。

その特徴は脂肪が少なく臭みがないことで、燻製などの加工に適していると言われる。ナラ、ケヤキ、クリなど、地元の広葉樹を使い15～20度の低温でじっくりと燻すことにより、鮭に旨味成分を十分に吸収させる。更に乾燥し硬くなったものを削り、生ハムのような食感の逸品が完成する。鮭と塩のみのシンプルな素材に、冷燻独特の豊かな香りが加わり食欲をそそるのだ。川で生まれ、海へ下り、遙かアラスカ沖まで旅をして、再び生まれた川へ還ってくる鮭。4～5年

を経て故郷を覚えている理由は未だ解明されていないが、有力な説は生まれた川の「匂い」を記憶する本能だと言われている。人間も故郷を遠く離れて何年も過ごしていると、無性に懐かしさが募る時があるが、「鮭冷燻・けずり」から放たれる匂いが、本能に訴えかけてくる気がするのには偶然だろうか？

最近新婚生活が始まった私。次回は妻の意見を受け入れ、胃袋をさらに鷲掴みされることで、尻に敷かれていくのは必然だろう。(K)

<http://www.sakereikun.fhd.jp/index.html>



vol.1 宮城県登米市

地域の魅力を発信する「東北風土マラソン」

多様な関係者が協働

今春、宮城県唯一のフルマラソン大会「東北風土マラソン」が開催された。「ランナーも、ランナーじゃなくても楽しいお祭りマラソン」をコンセプトに、順位や記録を競うだけでなく、ご当地グルメを味わったり風景を楽しみながら走れる点が特徴だ。スタート・ゴール地点では物産展や日本酒のきき酒コーナーを同時開催。さらに、ランナー向けの酒蔵ツアーや被災地訪問ツアーも併催するなど、観光団体、スポンサー企業、地元事業者などが一体となって地域の魅力を発信し、復興途上の東北に観光客を呼び込む新たな取り組みでもあった。

当日、全国から登米市に集まったランナー、ボランティアは1,500人以上。大会前日には登米市内の宿泊施設が全て満室になり、近郊の道の駅は通常の2倍以上の売上を記録した。

マラソンのコース途中ではランナーに南三陸の

「たこの唐揚げ」、登米の「はっと汁」、気仙沼の「フカヒレスープ」など東北各地の名物と、日本酒の原料となる仕込み水が振るまわれた。さらにゴール地点では、完走者には升と宮城県産の米、日本酒の利き酒チケットを配布。大会後に実施したアンケートでは、「満足」と回答したランナーは97%に達した。登米市観光物産協会会長の阿部泰彦さんはその成果をふまえて、「登米市最大のイベントとして今後も取り組みたい」という。さらに、スポンサーの1社である株式会社アシックスは、組織風土醸成の機会としても活用するなど、イベント協賛の新たな可能性も示した。

地域に人を呼び込むイベントの成功の秘訣は、立場も利害も異なる多様な関係者たちが協働したことにある。彼らのはどのように一つにまとまったのか。その詳細は東北復興新聞 web 版で。

秘湯探訪

東北をゆく

vol.9 岩手県一関市

「矢びつ温泉 瑞泉閣」

平泉の荘園で入るのんびり田園の湯

奥州藤原氏の権勢を今に伝える平泉・中尊寺。その荘園として栄えた旧骨寺地区にある矢びつ温泉は、懐かしい農村風景の中に立つ一軒宿だ。東北新幹線の一関駅から車で30分の好立地で、ビジネスバックあり、無料送迎あり。東北に通う身にはありがたい宿ということで訪れた。

一関駅から車に乗り宿を目指すと、途中には奇岩が点在するエメラルドグリーンの巖美溪が見えてくる。ここでは寄り道して名物の郭公団子をお勧めしたい。東屋で木槌をコンと鳴らすと川向うからロープをつたって団子が下りてくる。時代劇の1シーンで見たようなレトロ感を味わったら、いよいよ宿のある旧骨寺地区へ。

田植えが終わったばかりのみずみずしい田園風景は、今も中世荘園時代と変わらない景観を残すという。

平成元年に温泉が湧いたこの地は、かつては歩いてしか行けない秘湯だった栗駒山麓の須川高原温泉へ湯治に行く人々が山に入る起点だった。宿についたら、さあ温泉へ。巖美溪に流れ込む磐井川の溪流を見下ろす露天風呂は、川もやに包まれて、夜空には天の川が見える。朝が来れば遠くには田んぼも見渡せる。弱酸性でなめらかな肌触りの湯につかり、旅の疲れを癒したら、土地の食べ物に元気をもらおう。黄金こめ豚やしょうが餅など、料理はどれも素朴だが



しみじみおいしい。

「なーんもないとこです」と宿の人は言うけれど、こういう田舎が都会人には何より嬉しい。東北に行くならビジネスホテルではなく田舎の温泉でのんびりしたい。そんな夢を叶えてくれる田園の秘湯だ。(L)

お問い合わせ: 0191-39-2031

東北復興新聞 WEBサイトから

東北復興新聞WEBサイト (<http://www.rise-tohoku.jp>) では、紙面に掲載した以外にも復興現場の記事が掲載されています。通常記事の他にもイベントやツアー、助成金などの情報も満載。ぜひご覧下さい。



企業による復興支援のこれから

vol.7 [アクセンチュア]

コンサル視点のCSRで東北の若手起業を支援



年間150万人来場、売上30億円のマンモス朝市

[青森県八戸市]

盛り上がる「館鼻(たてはな)岸壁朝市」運営の秘訣



シリーズ「他地域に学ぶ」

vol.13 [福岡県津屋崎町]

移住者を着実に増やす「福岡の田舎」に流れる哲学

